

平成22年 3月31日現在

研究種目： 若手研究(B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19730405
 研究課題名（和文） 小・中学生の放課後活動が、居場所感・学習意欲・適応感にどのような影響を与えるか
 研究課題名（英文） The influence of after-school activities on elementary and junior high school students' school adaptation.
 研究代表者
 角谷 詩織 (SUMIYA SHIORI)
 上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
 研究者番号：90345413

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、小・中学生の放課後の過ごし方が、彼らの適応感や学業への態度(学習意欲など)にどのような影響を与えるのかを検討することである。質問紙調査（平成19年7月、平成20年3月、平成20年7、11月）、観察（平成19年7月～平成21年12月）、インタビュー（平成21年3月）を主たる研究手法とした。小学生での放課後の読書をはじめとするリテラシー活動、中学生における部活動が学習意欲や学業コンピテンスを高める可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the influence of after-school activities on elementary and junior high school students' school, social, and psychological adaptation, academic competence, and motivation for learning. Two-wave questionnaire, observation of activities, interviews were conducted from July, 2007 to December 2009. Reading books and newspapers related to elementary school students' positive psychological, academic, and social adaptation. Participation in clubs managed well by teachers related to junior high school students' positive adaptation.
 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	390,000	2,490,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：放課後活動、小学生、中学生、適応感

1. 研究開始当初の背景

思春期の適応的発達に必要な環境についての理論として、Ecclesら(1993, 1998)の発達段階-環境適合理論がある。この理論の中で、思春期の子どもに必要な環境の要素として、自律性の獲得、所属感の充足、知的好奇心の

充足があげられている。この理論は、人間の適応に必要な環境という一般的視点から、思春期という特定の発達段階にて顕著に現れる課題に注目し、それらに適合した環境を具体的に三点見出した点で、発達心理学分野において重要な理論である。しかし、この理論

での「環境」が、学校の正課時間内の環境に限定されている点、他の発達段階については触れられていない点に限界がある。本研究では、「子どもの適応的発達には、各発達段階に顕著に現れる課題に適合した環境の提供が必要」という理論を、児童期の子どもの発達課題にも適合した教育環境についての理論的適用を可能としたい。また、教育環境として、正課時間内の学校教育環境だけでなく、地域や家庭での教育力への提言と発展させるため、児童期・思春期の放課後活動の必要要因について検討したい。

角谷(2005)は、発達段階-環境適合理論が確立されるまでの理論化プロセスを参考にしつつ、その理論を、中学校の課外活動・放課後活動にも応用発展させることに成功し、その成果が認められた(2005年小貫英教育賞)。本研究では、これらの理論的枠組みをさらに発展させ、小学生の放課後活動、また、地域や家庭でもできる、小・中学生の学年に応じた放課後活動のあり方を提案したい。

学年に応じた放課後活動を、発達段階-環境適合理論に基づいて検討するためには、各学年の子どもに顕著な発達の課題が何であるのかを明確に捉える必要がある。本研究では、質問紙調査の実施が可能な、小学校中学年、高学年、中学生の3段階に学年を分け、各段階に必要な放課後活動のあり方を検討し、その特性を見出したい。

さらに、情報化が進んだ今日では、インターネットを含むメディアも子どもの社会に影響を与える要因である(住田・高島, 2000)。就寝時間が遅くなるなどの基本的な生活習慣の乱れ(深谷ら, 2006)、遊びなどの中での実体験の減少(角谷, 2004; 2006)も、子どものメディアへの接触時間と関連する。日常にメディアが深く入り込んだ世界で生活する子どもたちが、生活基本的な生活習慣、豊かな実体験や集団活動、他者の気持ちを理解した上での自らの行動調整の力を育む環境が必要である。

2. 研究の目的

本研究を通して以下の三点を中心に明らかにしたい。(a)小・中学生の居場所感の獲得、学習意欲、心身の適応に有効な放課後の活動の特性を、質問紙調査が可能な小学校中・高学年、中学生の3つの発達段階に分類して明らかにする。主たる手法として、小・中学生への質問紙調査、インタビュー、放課後活動の観察を行う。(b)縦断的な追跡調査結果も踏まえ、3つの段階において、有効であると評価できる活動を把握する。(c)これらを踏まえ、学校や地域、家庭において、子どもが放課後にどのような過ごし方をすると、彼らの学校への適応感、学習意欲、社会性、心理的適応を高めるのかについて、一つの提言をする。

3. 研究の方法

調査方法：質問紙法、観察法、面接法。

(1). 質問紙法

調査対象 公立の小学4年生～中学3年生
1792名

調査時期 小学生：2007年7月、2008年3月

中学生：2008年7月、11月

調査内容 縦断的質問紙調査で、個人の変化や因果関係を捉えるため、氏名の記入欄を設けたが、差支えない範囲での記入でよいこと、個人情報の保護、調査回答と学校の成績とは無関係であることを明記した。フェイス・シートその他、以下の項目を作成した。

小学生：児童の放課後の生活習慣について、16項目を尋ねた。これらは、角谷(2005, 2007)の生活習慣に関する項目を用いるとともに、「新聞を読む」、「マンガ以外の本を読む」などの日常的言語活動に関する項目を追加したものである。続いて、学校生活における態度や意欲(学校適応感、学習意欲、学業コンピテンス、抑うつ傾向、論理的思考)について28項目を尋ねた。これらは、角谷(2005, 2007)の項目を用いた。友だちとの人間関係形成に対する態度、普段の人間関係で感じることにについて、小学校教員との話し合いをもとに10項目を作成した。生活習慣に関する項目は、「1. したことがない」～「5. ほとんど毎日する」の5件法、それ以外の各尺度は「1. そうは思わない」～「4. そう思う」の4件法による回答を求めた。

中学生：学校生活における態度や意欲に加え、吉村(2007)、角谷・無藤(2001)などを参考に、部活動への満足感や適応感、部活動での人間関係に関する64項目を作成した。各項目とも「1. 当てはまらない」～「4. 当てはまる」の4件法を用いた。

なお、統計ソフトは、SPSS ver. 16.0を用いた。

(2). 面接法

小学1年生の保護者3名、小学4年生の保護者3名を対象に、2008年3月実施した。放課後児童クラブに対する子どもの意識、放課後の過ごし方について尋ねた。

中学3年生8名を対象に、2009年12月に実施した。部活動を振り返って大変だったこと、役立ったことを尋ねた。

(3). 観察法

2007年10月～2009年3月、毎週1回、中学校の部活動をビデオ録画およびフィールドノーツを用いた観察を実施した。

4. 研究成果

小学生対象の研究成果を中心に記す。

(1). 小学生の放課後の過ごし方

放課後どのような過ごし方をしているのか把握するため、スポーツ、新聞、読書、インターネット使用、予習復習、塾や習い事について、それぞれ1週間当たりどの程度行っているのか回答を求めた(表1~10)。

	T1	T2
したことがない	.88	.68
ほとんどやらない	17.72	15.63
1日~2日くらいする	25.51	24.08
3日~4日くらいする	24.54	26.99
ほとんど毎日する	31.35	32.62

	T1	T2
したことがない	14.81	15.06
ほとんどやらない	39.28	38.48
1日~2日くらいする	21.44	21.19
3日~4日くらいする	13.35	11.37
ほとんど毎日する	11.11	13.90

	T1	T2
したことがない	5.96	3.51
ほとんどやらない	23.66	27.39
1日~2日くらいする	26.30	27.78
3日~4日くらいする	21.51	22.32
ほとんど毎日する	22.58	19.01

	T1	T2
したことがない	35.48	31.29
ほとんどやらない	26.90	28.38
1日~2日くらいする	17.74	21.77
3日~4日くらいする	10.23	8.26
ほとんど毎日する	9.65	10.30

	T1	T2
したことがない	40.31	36.83
ほとんどやらない	32.23	37.61
1日~2日くらいする	15.58	16.23
3日~4日くらいする	7.59	5.25
ほとんど毎日する	4.28	4.08

	T1	T2
したことがない	54.48	55.12
ほとんどやらない	20.66	19.71
1日~2日くらいする	7.89	9.66
3日~4日くらいする	4.00	6.15
ほとんど毎日する	12.96	9.37

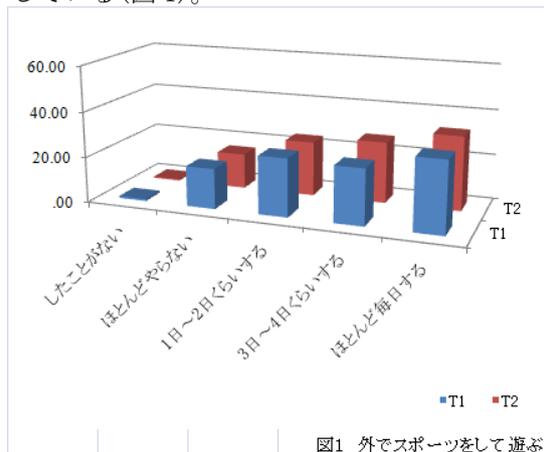
	T1	T2
したことがない	14.30	11.83
ほとんどやらない	32.20	34.24
1日~2日くらいする	26.17	26.96
3日~4日くらいする	13.62	15.23
ほとんど毎日する	13.72	11.74

	T1	T2
したことがない	11.75	8.37
ほとんどやらない	28.64	30.45
1日~2日くらいする	26.89	28.60
3日~4日くらいする	16.41	16.34
ほとんど毎日する	16.31	16.25

	T1	T2
したことがない	54.15	54.09
ほとんどやらない	5.85	5.64
1日~2日くらいする	20.10	23.35
3日~4日くらいする	7.02	8.66
ほとんど毎日する	12.88	8.27

	T1	T2
したことがない	19.81	17.25
ほとんどやらない	5.34	7.27
1日~2日くらいする	26.60	30.81
3日~4日くらいする	17.77	21.41
ほとんど毎日する	30.49	23.26

今日の小学生の主たる特徴として、以下の点があげられる。過半数の子どもが、週3日以上外でスポーツをして遊ぶなど体を動かしている(図1)。



一方、新聞は「ほとんど読まない」が4割弱、読書は週ほとんどしない~2日程度が過半数で、習慣的に文章に触れ合う習慣のある子どもは少ない(図2, 3)。インターネットの使用率も高くはない(図4, 5)。

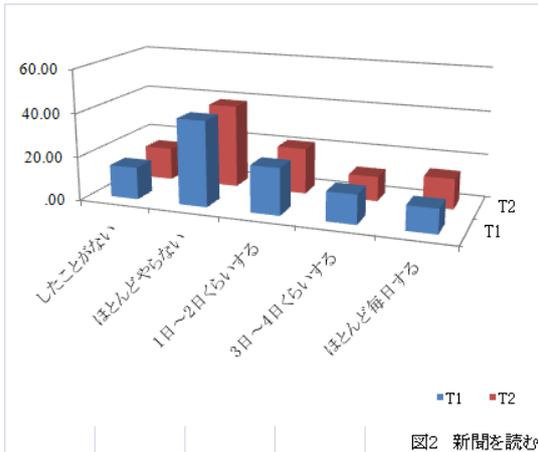


図2 新聞を読む

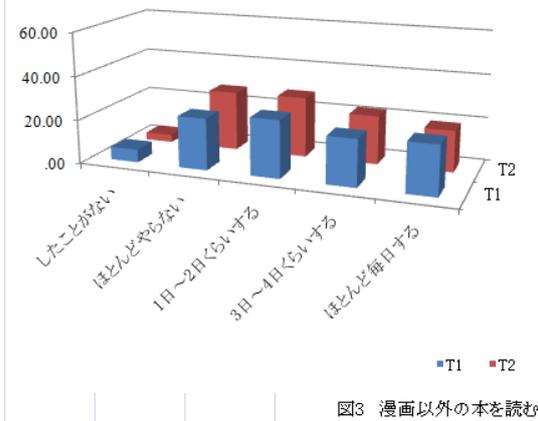


図3 漫画以外の本を読む

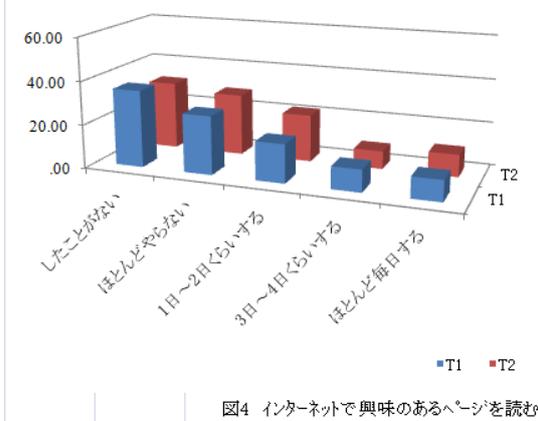


図4 インターネットで興味のあるページを読む

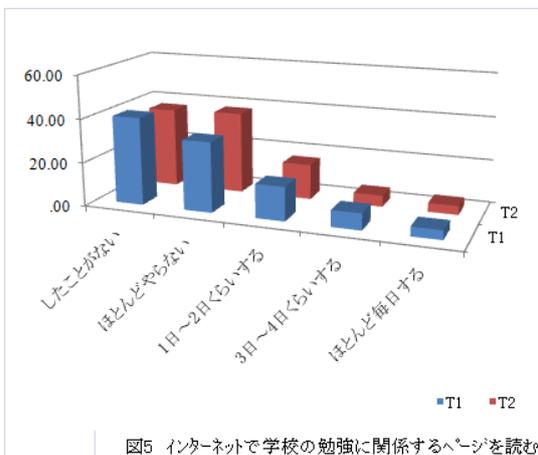


図5 インターネットで学校の勉強に関係するページを読む

予習復習は、週に1日程度行う子どもが3割弱いるが、ほとんどその習慣のない子ども3割程度いる(図6, 7)。

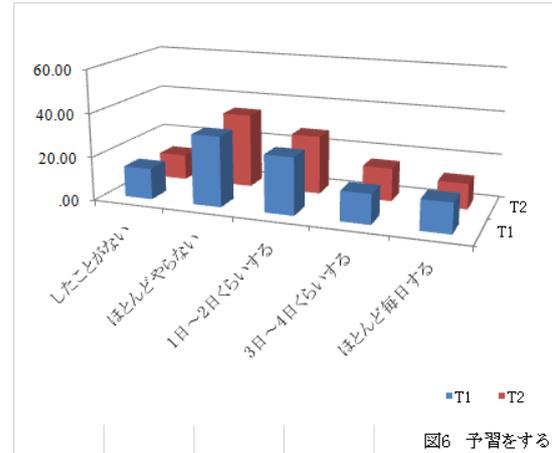


図6 予習をする

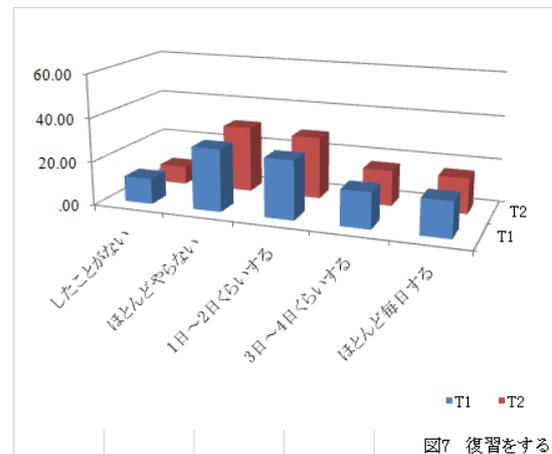


図7 復習をする

塾などの習い事について、塾に行ったことがない子どもが過半数を占め、行っている子どもでも週1～2日程度が2割強で最も多い。しかし、ほとんど毎日塾に行っている子どももあり(図8)、個人差の大きさが示された。塾以外の習い事もまた、個人差が大きく、ほとんど毎日何らかの習い事等に通っている子どもが3割前後いる(図9)。これは、親の就労状況とも関連していると思われる。

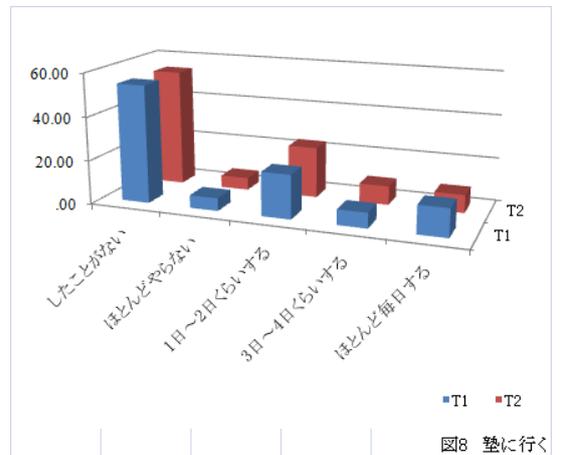
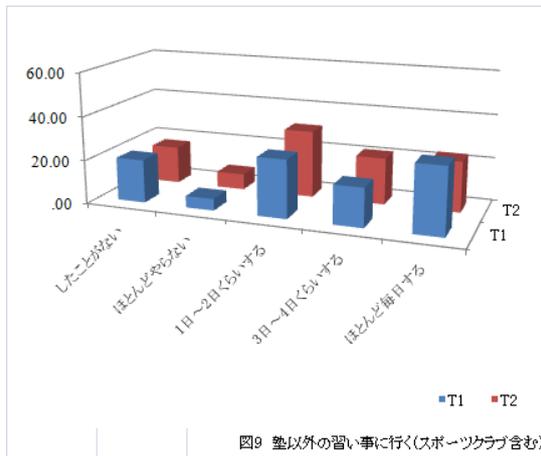


図8 塾に行く



(2). 放課後の活動と学業への態度、学校適応感、人間関係適応感との関係

小学生の放課後の過ごし方が、学業への態度、学校適応感、人間関係適応感とどのような関連をもつのかを検討するために、4-1で取り上げた放課後の活動と、学業コンピテンス(「自分は成績が良いほうだと思う」等5項目からなる合成変数)、社会的コンピテンス(「自分の気持ちを説明してわかってもらえたと感じる」等5項目からなる合成変数)、学校適応感(「今の学校生活に満足している」等5項目からなる合成変数)、学習意欲(「勉強することで自分が成長すると思う」等5項目からなる合成変数)、抑うつ傾向(「何もやる気がしなくなる」等5項目からなる合成変数)、コミュニケーション消極性(「自分のことをわかってもらおうとして、いちいち言葉で説明するのはめんどろうだ」等5項目からなる合成変数)、コミュニケーション消極性(「誤解されていると感じる」等5項目からなる合成変数)間の相関係数により検討した。T1の結果を表11に記す。

「外でスポーツをして遊ぶ」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .18, p < .001$)、「社会的コンピテンス」($r = .10, p < .001$)、「学校適応感」($r = .12, p < .001$)の高さと有意な正の相関がみられ、「抑うつ傾向」($r = -.13, p < .001$)、「コミュニケーション消極性」($r = -.10, p < .001$)の高さと有意な負の相関がみられた。

「新聞を読む」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .13, p < .001$)、「社会的コンピテンス」($r = .15, p < .001$)、「学習意欲」($r = .08, p < .05$)の高さと有意な正の相関がみられ、「コミュニケーション消極性」($r = -.12, p < .001$)の高さと有意な負の相関がみられた。

「漫画以外の本を読む」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .19, p < .001$)、「社会的コンピテンス」($r = .18, p < .001$)、「学校適応感」($r = .11, p < .001$)「学習意欲」($r = .17, p < .001$)の高さと有意な正の相

関がみられ、「コミュニケーション消極性」($r = -.14, p < .001$)の高さと有意な負の相関がみられた。

「インターネットで興味のあるページを読む」頻度の高さは、「学校適応感」($r = -.09, p < .01$)「学習意欲」($r = -.08, p < .01$)の高さと有意な負の相関がみられ、「抑うつ傾向」($r = .10, p < .001$)、「コミュニケーション消極性」($r = .10, p < .001$)、「誤解感」($r = .13, p < .001$)の高さと有意な正の相関がみられた。

「インターネットで学校の勉強に関するページを読む」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .10, p < .01$)、「社会的コンピテンス」($r = .14, p < .001$)、「学校適応感」($r = .08, p < .05$)の高さと有意な正の相関がみられた。

「予習をする」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .24, p < .001$)、「社会的コンピテンス」($r = .09, p < .01$)、「学校適応感」($r = .20, p < .001$)、「学習意欲」($r = .30, p < .001$)の高さと有意な正の相関がみられ、「抑うつ傾向」($r = -.13, p < .001$)、「コミュニケーション消極性」($r = -.15, p < .001$)の高さと有意な負の相関がみられた。

「復習をする」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .23, p < .001$)、「社会的コンピテンス」($r = .11, p < .01$)、「学校適応感」($r = .20, p < .001$)、「学習意欲」($r = .31, p < .001$)の高さと有意な正の相関がみられ、「抑うつ傾向」($r = -.10, p < .001$)、「コミュニケーション消極性」($r = -.17, p < .001$)の高さと有意な負の相関がみられた。

「塾に行く」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .12, p < .001$)、「学習意欲」($r = .06, p < .05$)の高さと有意な正の相関がみられた。

「塾以外の習い事に行く」頻度の高さは、「学業コンピテンス」($r = .19, p < .001$)、「社会的コンピテンス」($r = .12, p < .05$)の高さと有意な正の相関がみられた。

T2においても同様の結果が得られた。

以上の結果より、小学生の時期に、新聞や読書などのリテラシー活動を放課後に行うことは、彼らの学業に対するポジティブな態度だけでなく、友だちとの人間関係に対する積極性などの社会面、また、心理的健康面での適応を促す可能性が示唆された。これは、塾などに通うことにはみられない要因間の関連であった。一方、インターネットの使用に関しては、学校の勉強に関することを調べる活動に用いることは、学業面とポジティブな関連をもちうるが、自分の興味あるものをインターネットを利用して調べることは、小学生において、その有効性に疑問を呈する結果となった。

	学業 コンピテンス	社会的 コンピテンス	学校適応感	学習意欲	抑うつ傾向	コミュニケーション 消極性	誤解感
外でスポーツをして遊ぶ	.18 ***	.10 ***	.12 ***	.05	-.13 ***	-.10 ***	-.06 †
新聞を読む	.13 ***	.15 ***	.04	.08 *	-.03	-.12 ***	.03
マンガ以外の本を読む	.19 ***	.18 ***	.11 ***	.17 ***	.01	-.14 ***	.06 †
インターネットで興味のあるページ を読む	.05 †	.01	-.09 **	-.08 **	.10 ***	.10 ***	.13 ***
インターネットで学校の勉強に関 係するページを読む	.10 **	.14 ***	.08 *	.06 †	.04	-.03	.03
予習をする	.24 ***	.09 **	.20 ***	.30 ***	-.13 ***	-.15 ***	-.02
復習をする	.23 ***	.11 ***	.20 ***	.31 ***	-.10 ***	-.17 ***	.01
塾に行く	.12 ***	.00	-.02	.06 *	-.03	.00	.03
塾以外のなにかの塾に行く(ス ポーツクラブもふくむ)	.19 ***	.12 ***	.02	.01	-.04	-.06 †	-.05 †

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .1$

(3). 小学生の保護者の意識

インタビューの結果、小学校低学年の保護者では、放課後児童クラブに子どもが行くことに肯定的であるが、子ども自身が行くことを嫌がる場合もあること、特に、高学年になると、個人的に友だちと遊ぶことを望むことが多くなる傾向がみられた。

(4). 中学生にとっての部活動の意義

縦断的質問紙調査の結果、部活動に継続的に参加すること、特に、顧問教師による技術指導や集団マネジメントが積極的になされている部活動への参加が、中学生の学校適応や心理的適応を高めることが示された。

また、部活動観察の結果、顧問教師を中心とした部活動の指導者にあたる大人が、中学生の部活動中の行動への指導(技術指導、運営指導など)に当たる際に、書く行動に対するポジティブな言葉かけとネガティブな言葉かけを使い分けていることが示された。さらに、ポジティブな言葉かけ、ネガティブな言葉かけともに、中学生本人にとって理解可能であり、行動に一つ一つ対応したものである場合、生徒の部活動への意欲が高まることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

- ①角谷詩織. 小学校高学年における学校外での生活習慣の実態：性別・学年別の比較から. 上越教育大学紀要、査読無、28巻、2009、41-53.

- ②住友俊介・角谷詩織. 中学校部活動キャプテンのリーダーシップと中学生の学校生活における行動との関連. 日本発達心理学会第20回大会論文集、査読無、2009、273.

[学会発表] (計 3件)

- ①Sumiya, S. & Muto, T. The Influence of Television Programs on Social and Psychological Maladjustment in Puberty. European Conference on Developmental Psychology, August 18-22, Myokoras Romeris University, Vilnius, Lithuania, 査読有.

- ②住友俊介・角谷詩織. 中学校部活動キャプテンのリーダーシップと中学生の学校生活における行動との関連. 第20回日本発達心理学会、2009年3月23～26日、日本女子大学.

- ③Sumiya, S., & Muto, T. The longitudinal influence of television programs on social and psychological maladjustment in puberty. The First International Conference on Popular Culture and Education in Asia, 11-13 December 2008, The Hong Kong Institute of Education, 査読有.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

角谷 詩織 (SUMIYA SHIORI)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：90345413